



# 感染症とたたかう

第30号

2018年  
10月発行

発行：国立大学法人 長崎大学 監修：長崎大学病院 感染制御教育センター長・教授 泉川 公一  
お問い合わせ：長崎大学熱帯医学研究所 〒852-8523 長崎市坂本1丁目12-4 TEL：095-819-7800（代表） FAX：095-819-7805

## ● 私たちの暮らしと感染症 ●

# 蚊に刺されて うつる感染症に注意

## 海外渡航前には旅行外来で相談を



### 高温多湿な地域で流行する日本脳炎 わが国でも増加傾向で、予防が必要

今年の夏は、気温が高い地域が多く、そのために蚊の活動が鈍り、あまり蚊に刺されなかったという声を聞きます。日本では、ウイルスなどの病原体を持つ蚊に刺されて起こる感染症（蚊媒介感染症）は夏場を中心に流行しますが、熱帯・亜熱帯地域では一年中蚊が活動しており、そのため、蚊媒介感染症も常に流行しています。

蚊が媒介する主な感染症には、ウイルスが原因で起こるデング熱、チクングニア熱、ジカ熱、日本脳炎、ウエストナイル熱、黄熱などがあり、原虫によって起こるマラリアもあります。

日本脳炎は、日本脳炎ウイルスが蚊（コガタアカイエカ）によってブタから人に伝播されることで起こる感染症です。感染しても発病するのは100～1000人に1人程度ですが、発症すると38℃以上の高熱、頭痛、おう吐、めまいなどの

症状が現れ、乳幼児や高齢者の致死率は20～40%といわれます。

日本でも、かつては患者が多くみられましたが、予防接種により患者数は年間10人未満に減りました。日本脳炎ウイルスに感染しているブタは九州、中国、四国地方など西日本に多いとされ、これらの地域に住む人に対して日本脳炎ワクチンの接種が勧められています。

### デング熱、チクングニア熱などは 熱帯・亜熱帯地域では常に流行

日本脳炎以外の蚊媒介感染症は、海外から持ち込まれる輸入感染症でした。しかし、2014年の夏に、70年ぶりにデング熱の国内流行が報告されました。

デング熱はアジア、中東、アフリカ、中南米、オセアニアなど広い地域で流行しており、年間1億人近くの患者が発生していると推定されています。特に近年は、東南アジアや中南米で患者が急



増しており、こうした地域では、日本からの渡航者がデングウイルスに感染するケースもみられます。2014年、2015年の国内感染は、すべて海外からの輸入感染でした。

チクングニア熱は、1952年にタンザニアで、デング熱に似た疾患として初めて確認され、その後、アフリカやアジアを中心に小規模な流行があるだけでした。ところが、2004年以降、急速に流行地域が拡大しています。イタリア北部には始まり、2010年にはフランスや中国南部での流行が確認され、2013年末にはカリブ海の島国で流行、その後の1年間で米国、メキシコ、ブラジルを含むアメリカ大陸に拡大し、太平洋の島国でも流行しています。症状は、発熱と関節痛で、特に手足の関節が痛み、熱が下がっても数週～数カ月間、痛みが残る場合があります。

ジカウイルス感染症の患者は、近年、南太平洋地域と中南米を中心に急速に流行が拡大しています。わが国では、2013年に仏領ポリネシア、2014年にタイで感染して、日本に入国後に発症した輸入症例が確認され、2016年11月までに11例の輸入症例が報告されています。ジカウイルスに感染した人の約20%に発熱や皮疹などの症状が現れますが、ほとんどが後遺症もなく治ります。ただ、感染した母親から胎盤を通じて胎児に感染すると、小頭症などの先天異常をきたすこと

があり、2016年2月にWHO（世界保健機関）は「国際的に懸念される公衆の保健上の緊急事態」を宣言しています。

### 蚊に刺されないことが最も大切 帰国後に発熱したら検疫所へ連絡を

マラリアには抗マラリア薬による治療が有効ですが、日本脳炎を除くウイルスによる蚊媒介感染症にはワクチンがありません。感染を予防するには、流行地域で蚊に刺されないようにすることが重要です。

渡航先が流行地域であれば、渡航者外来（長崎大学病院）などに相談してください。

渡航先では、長袖・長ズボンを着用し、素足のサンダル履きを避けるなど、できるだけ素肌を露出しないようにし、虫よけ剤も積極的に使しましょう。

海外で感染して帰国してから、国内で感染が拡がることを防ぐためには、帰国後も注意が必要です。帰国時や帰国後に発熱などの症状がある場合は、検疫所や最寄りの福祉保健センターなどに相談してください。